2023 年　1 月　30 日

NPO パートナーシップ協力プログラム　事業終了報告書

団体名　特定非営利活動法人富岡町３・１１を語る会
代表者名　青木　淑子

１．事業名
「ふくしま」の 10 年を明日に繋ぐ伝承活動の継続を目指した、3・11 複合災害を語り伝える人材育成事業

２．事業カテゴリー
夢を応援・東北 NPO パートナー協働事業

３．事業期間　　2022 年　1 月　1 日　～　　2022 年　12 月　31 日　（　365 日間）

４．契約金額
4,994,600 円

５．担当者名
松本愛梨

６．事業目的
福島の復興の原動力となる「人のつながり」を作るために、地域を超え世代を超えて「語り伝える人（語り人)」を育てると共に、先進地（広島、長崎、沖縄など）に学びながら、育成プログラムを作成し、今後語り人活動が継続していくための基盤を構築する。

７．事業の成果

８．事業種別（コンポーネント）ごとの成果

（1）　コンポーネント①世代別「語り人」教室の開催と交流の場の提供

●こどもの語り人育成教室（対象：小 3～6）

開講日：毎月 2 回（第 1・3 土曜日）

地域（双葉郡内）の小学生を対象に、現在「暮らしの場」となってる自分たちの地域を知り、人に語り伝えるための「学びの場」をつくることを目的に実施。

郡内に公募したが集まらず、富岡町内小学校の児童 1 名とその兄弟の中学生 1 名が応募。2 人は 2022 年 4 月に富岡町に転校してきたばかりで、町についての知識はゼロであった。町を知るには、まず興味をもつことと考え、iPad を持って町内を歩き「誰かに教えたい町の魅力」を探し、youtube 動画を作成した。参加する対象の興味関心を引く事項を把握することが重要であることを改めて学んだ。

参加した児童と生徒は、初めての Youtube 作成に興味を持ち、取材する中で、町の現状を自分の目でとらえ、その中から「町の頑張っている姿」を発見できた。また、Youtube を配信することで、多くに人に発信できた達成感を得ることができた。

●中高生の語り人教室（対象：中 1～3）
　開講日：長期休業中（夏・冬１回ずつ）
　地域（双葉郡内の中学生と高校生から希望者を募り、地域を知り、地域の課題を考え語り合う中で、よりよい地域づくりにつながる発想などを語り伝える「学びの場」を作る。
中学生と高校生は
①「富岡町をつくった人」（町の歴史を知る中で、魅かれる人物を発見する）⇒町施設「とみおかアーカイブ・ミュージアム」と連携。
②「町を現在作っている人」（震災後の町で頑張っている人を発見する。
上記 2 点について調べ発表した。
「調べる学習」「語る学習」ができた。
夏の講座：小学生 2 名、高校生１名
冬の講座：参加者ゼロの為中止
アーカイブミュージアムの学芸員の説明から、富岡町の歴史を学ぶことができた。
中には、自分から町史を開いて、興味を持った出来事や人物を調べる生徒もいた。
最終日には、自分で見つけた「町のキーマン」について発表したが、人に伝えるための
内容のまとめ方や話し方にもしっかりと取り組んでいた。

●若者の語り人教室（対象：大学生など）
開講日：5 月連休、9 月連休
県内の若者から対象者を募り、富岡町に宿泊して（2 泊 3 日）、復興の現状と課題さらに伝承の意義を知り、自ら語り伝えるための「学びの場」を作る。
「町を知るには人を知ること」を重要な課題と考え
　①「富岡町に生きる人と出会い、話を聞きとる」
　②「聞いた話を自分の言葉で語る」
　5 月講座：大学生 3 名、9 月講座：大学生 3 名
　特別講座（8 月）：宮城教育大学のゼミの校外学習として本会の語り人育成講座を実施 20 名
　（5 月講座・９月講座の受講生）
　町に宿泊することで、復興途上の町での暮らしを実感することができた。
　現在富岡町で暮らす人との出会い、その人の暮らしや思いを聞くことで、災害の現状、避難生活の状況町への思いや課題などを、「人の言葉」を通して知ることができた。
　発表にあたっては、自分の言葉で発信することの難しさと大切さを実感した。
　聞いている町民からの感想で、「声の大きさ」「言葉の明瞭さ」などでの指摘があり、表現力の大切さにも気づくことができた。
　（９月講座）
　宮城教育大学の学生が、１０名の町民から聞き取りをしたが、「語ること」は「聞く力」が基本になることを学んだ。町民と向き合う学生の真摯な態度が、町民の心から出る言葉を引き出していくことができた学生たちの発表では、聞き取りをした町民の体験や心境を、自分の言葉で表現することができた。

●語り人実践スクール（対象：福島県民など）
開講日：毎月 1 回（第 3 日曜日）
県内から、双葉郡の現状を語り伝えたいと希望する人を集め、富岡町で、何を誰にどのように伝えるのか

を「学ぶ場」をつくる。
震災・避難生活の体験者、または震災の伝承活動に関心をもち、携わりたいと希望する人が応募してきた。すでに語り人として活動している人とこれから語ろうという人が、それぞれの立場から意見交換をし、①「語る事の意義」「語る内容」「語るにあたっての課題」などを話し合う機会を得た。②語る内容を整理し、文章化する。③自分の言葉で表現の工夫をし、発表することで、「語り伝える事の意義」を改めて意識することができた。
●語り人交流会（年１回）
各世代別の教室に参加している「語り人」がそれぞれの世代と地域との関わり方などを話し合う場を作る。
小学生・大学生・一般の参加であったが、それぞれの講座の内容を共有することができた。
また、世代間交流にもつながり、お互いの立場でどのようなことが伝えることができるのか？どんな手法があるのか？知ることができた。
また、高齢世代の体験者からは今回参加した若い世代に自分の話を引き継いでもらいたいという声もあがり、後世に語り伝えていきたい・自分の体験を残していきたいという強い想いも感じられた。

●伝承祭（年１回）
世代ごとの講座から代表が発表（小学生１名、中学生１名、大学生１名、一般４名）
県内から高校生が参加し、育成講座参加の発表を聞くことができた。（郡山・矢吹・相馬・
いわき）
町内の音読教室の受講者による朗読劇の発表は、町の歴史、震災後の町の現状が「語る」だけではなく、朗読劇という形でも伝えられるという事を学んだ。
「語り伝える」という伝承の表現方法はさまざまにあって、工夫されていくものだという事も学ぶことができた。
福島の災害は、世代を越え、地域を越えて、語り伝えられて行き、「知ること」「考える事」「行動すること」につながり広がっていくことを、集まった人たちがしっかりと実感できた。

コンポーネント②「語り人」育成プログラムの作成
各世代ごとに、語り伝えるために必要な「学び」を、「講義」「実技」「演習」などの段階に構成したプログラムを作成する。伝承活動の先進地である「広島」「長崎」「沖縄」の状況を調査し、本会の現状と比較分析をしながら、プログラムを作成する。
今年度：調査→検討→プログラムを作成→実践→検証→プログラム修正と完成。
次年度：プログラムのテキスト化、指導者育成。
今年度の作成委員会の活動
・「カタリベ」とは何か？という本質を討議した。
・それぞれの世代別の育成講座を実施しながら、作成委員の会議を実施した。（同時進行）
世代別の育成講座については、あくまでも実験的に実施し、それを委員には検証してもらい、そこにある問題点を探り、対策を協議して、プログラム作成に生かしていこうと考えたが、実際には検証まで行かなかった。
次年度、継続して育成プログラムの作成に取り組んでいきたいと考える。
・先進県視察
長崎の視察は、プログラム検討委員二名（泉田淳　武田信二）が視察。
長崎における伝承活動の、組織、方法、実際の伝承などを視察し報告をした。

行政が関わって伝承活動の組織を作っている点、伝承の継承をするためのシステムがしっかり作られていること、体験者と伝承者の研修など、今後の次世代へ継承を行っていくために大変学ぶところがあった。

９．事業全体を通じて得た教訓や課題等

１　小学生の育成について

教訓

「語り人」という言葉に、抵抗を感じる児童が多いことが分かった。震災や原子力災害の記憶のない世代であり、「語り人育成」そのものに興味関心がわかず、講座に参加しようという気持ちを持つ児童が少なかった。しかし、現実には、町は震災や原子力災害のために、未だ復興の途上にあり、他の町村とは違う現状の中で暮らしている。「町の現状を知る」「なぜ？と考える。」「町に起きた出来事（震災や原子力災害）について知る」「これからどうしたらよいか？を考える」といったことは、児童にとって大切なことであり、知って考えたことを「語る」ことは必要な学びであることは間違いない。今後、育成講座に参加しようという児童をどのように増やしていくかを工夫をしていかなければならない事を学んだ。

課題と対策

・小学生の語り人育成講座への参加希望者を増やす」

・「語り人育成講座」の名称を工夫し、講座参加へのハードルを低くする。

・小学校の教育活動とのコラボレーションを考える。（総合学習における「地域について」「町の歴史」などの学習と連携する。大人の語り人が授業に参加するなど）

・発信の方法を、児童と一緒に考える。（ユーチューブ、紙芝居、人形劇、朗読など）

２　中高生の育成について

課題

学校の行事や部活動と重なり、講座への参加を断念する生徒もいた。現在、福島県では、中学生や高校生への課題学習、表現活動などを県主導で企画実施しており、震災や原子力災害と福島の復興について関心を持っている生徒は、その事業に参加している。（ナラティブスコラなど）

中高生の講座参加が年間を通して２名だったことの一因と考えられる。

課題への対策

・講師の選定（中高生が魅力を感じる講師）

・講座内容の工夫（学習面や進路選択につながる効果、表現力育成など　多様な伝承活動の企画実施など）

・会場の工夫（他地域における開催も考える。）

３　大学生の育成について

教訓

５月講座、９月講座ともに少人数（２～３名）であったが、中通りの学生が参加し町内居住町民の話を聞き、震災体験や避難を通して「人生の軌跡」を受け止めていた。話す方も受け止める方も、真剣に向かい合う姿が印象に残る。世代の違いが、より相手への関心を高め、知ろうとする思いが強くなることを知った。

課題

他地区からの参加で、宿泊を伴う講習の場合、宿泊施設などが町内にないため、参加者の負担が大きくなることが課題となる。

課題への対策

・学生が宿泊して学べる宿泊先の工夫が必要である。８月の特別講座では９名の学生が、町民の話を聞き取り、それを自分の言葉で語った。大学のゼミなどで校外学習と位置付けての参加であったが、今後の一つの

方向性として積極的に取り入れたいと考える。
・町民への聞き取りを増やし、「富岡町人マップ」を完成させるなど、受講の成果の見える化を考える。
・講座の会場を工夫（他地区、県外での開催）
４　語り人実践スクール（一般の育成）
教訓
震災から１１年たった現在、「語って来た人」と「これから語ろうと思う人」が同席して、「何を」「誰に」「どうして」語るかという語りの原点に立てたことは大きな意味があった。表現方法の講習も有意義であった。
課題
・実際に人に語る場の設定が必要である。
・思いはあっても、人にとどく話し方や内容の絞り方がうまくできない。
課題の対策
・語り人として語る場を作り、実践をもっと増やす。（アーカイブ施設などでの口演を実施する。）
・表現力向上の講習を増やす。
５．交流会
世代によって、参加できない受講生がいた。
中高生は部活動や学校行事が重なり、参加できなかった。
開催日の調整を図り、より多くの受講者が参加できる工夫をする。
６．伝承祭
教訓
各育成講座からの発表者は、原稿作成をはじめ、表現の工夫などの準備をし、真剣に取り組む姿が見られ人に語るという事が、その人の意識を高め、自己肯定感と聞いてくれる人への感謝・信頼を生み出すものであるという事がわかった。
課題と対策
福島県教育委員会の「高校生語り部育成事業」と生涯学習課の「語り部育成事業」と連携して、本会の伝承祭にそれぞれの受講者が発表者、または観客として参加する事を協議する。
同じ目的を持つ事業が立ち上げられているので、整理連携して、参加者を増やし、切磋琢磨してレベルアップすることが望める。

１０．　協力体制の構築
（１）福島県との協力
①県教育委員会が２０２１年度から始めた「高校生の語り部育成事業」との連携
本会の語り人が育成事業の講座の講師を務めている。（伝承館、各高校）
県教委が、この事業を取り入れた学校に対して実施することは「伝承館視察」、「各学校で講師を招いて受講」の経費負担にとどまる。あとは各学校が生徒の課題を引き出し、その解決に向けての調査や検証を指導し、最終的には発表会で発表すことになっている。
現在、本会では、伝承館や各学校での講義の依頼を受け対応しているが、今後、課題の調査や検証の指導まで請け負う事ができればよいと考えている。

②県生涯学習課が、２０２２年度から「語り部育成事業」を企画し、本県の語り部事業の持続可能な基盤づくりを始めた。
一足早く着手している本会と連携し、今年度は、担当者が本会の事業にたびたび参加し研修した。

長崎視察も、同行した。さらに、本県の語り部活動をしている団体のネットワークづくりを進め、語り部ネットワーク会議を設立し、本会代表の青木淑子が会長になった。

育成プログラムの作成も計画していることから、次年度は、連携と事業のすみわけを明確にし、行政の力を取り入れながら育成事業の強化を図りたいと考える。

（２）富岡町との協力

①町教育委員会からは、語り人育成講座の実施については、「共催」を受けており、会場費を無料としてもらっている。

②生涯学習課管轄の「アーカイブ・ミュージアム」との連携を今後は強化し、アーカイブ・ミュージアム内で語り人活動が実施できればと申請している。

（３）メモリアルネットワークとの連携

岩手・宮城・福島三県の語り部活動の連携と組織化は、今後の伝承活動を持続していくうえで、必要なことであり、連携を強化していきたいと考える。

１１．　Civic Force との協働について

メリット

・語り部活動への助成金がなかなか認められない現状があり、２０２２年度語り部育成事業にご支援いただいたことは、ありがたいことでした。

・申請にあたって、語り人育成の必要性、視察先の吟味など、言葉足らずの部分を丁寧に指摘、助言をしていただき、取り組む事業への意識を改めて整理できました。

・事業の実施にあたって、実際に参加していただき、現場の雰囲気や状況を見ていただけたことが、何より励みになりました。

・共同事業費の概算も時間をおかずにいただけたこと、助かりました。